

朝日選書
228



伊藤虎丸

魯迅と日本人

アジアの近代
と「個」の思想

伊藤虎丸 著

魯迅と日本人

アジアの近代と「個」の思想

朝日選書 228

伊藤虎丸(いとう とらまる)

1927年東京で生まれる。旅順工科大学予科，東京教育大学，同大学院を経て東京大学大学院中退。明治学院高校教諭，広島大学教授，和光大学教授を経て東京女子大学教授。専攻，中国文学。著書に『魯迅と終末論』（龍溪書舎）『創造社研究』（アジア出版）など。

魯迅と日本人 アジアの近代と「個」の思想 朝日選書 228

1983年 4月20日 第1刷発行

定価 980 円

著 者 伊 藤 虎 丸
発 行 者 初 山 有 恒
印 刷 所 共同印刷株式会社
発 行 所 朝 日 新 聞 社



〒104 東京都中央区築地 5-3-2 電話03(545)0131(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部 振替・東京0-1730

©T.Ito 1983 Printed in Japan 装幀・多田進

0398-259328-0042

目次

はじめに——いま魯迅に何を問いたいのか……………3

なぜか関心をひかない中国近代文学 3 西洋近代を学ん

で「優等生」の日本 7 魯迅への五つの問いかけ 11

魯迅の「個人主義」の発展段階 15

I 魯迅と日本の明治文学……………19

魯迅の死をめぐる象徴的な出来事 19 「藤野先生」に浮

かぶ「真の人間」の関係 23 評論の一部に日本書のタネ

本 27 明治三〇年代文学との「同時代性」 32 詩

人ケルナーをめぐる魯迅と石川啄木 33 斎藤野の人に触

発された魯迅 36 ナシヨナリズムにみる啄木と魯迅 39

魯迅の「文明批評」的な態度 42 「文明批評家」として

の「詩人」の役割の強調 45 魯迅のナシヨナリズムの特

徴 43 日本における最初のニーチェ流行 49 わが

国知識青年の「自我」の推移 51 ニーチェ像の変遷とそ

の意味 54 魯迅のニーチェ理解と受容 56 魯迅と

II 魯迅の西洋近代との出会い……………81

- 高山樗牛のニーチェ的人間像 58 ニーチェの個人主義の影響 61 魯迅の意図した民族の国粹の回復 64 魯迅と内村鑑三が共有したもの 66 アウトサイダーとしての内村と魯迅 70 『代表的日本人』と魯迅の二極構造 73 共通のモチーフ「新しい民族的主体の発見」 77
- 生い立ちと身につけた古典の教養 81 故郷の紹興と農村への美しい記憶 85 伝統的な文化遺産のもつ二重性 88 故郷を脱出、南京の洋式学校へ 89 東京留学時代に形成された「原魯迅」 92 近代科学理解に対する魯迅と福沢諭吉 94 「中国分割」の危機に「地質救国」の志 97 東京での中国革命運動に参画 99 「政体進化の公式」論を拒否 102 精神・倫理の問題としての科学 104 魯迅の考えた「科学者の精神」 107 科学と愛国が結びついた自立への希求 110 魯迅における東洋文明と西洋文明 113 魯迅が衝撃を受けた嚴復の『天演論』 115 魯迅の「ニーチェの進化論的倫理観」 118 近代科学受容の態

度が示唆するもの 122 科学者魯迅から文学者魯迅へ 124
最初の文芸運動に失敗して帰国 127

III 小説家魯迅の誕生……………131

三十七歳にして最初の小説「狂人日記」 131 杭州・紹興
で教師として勤める 133 独立・共和を期待し『越鐸日報』
を発刊 135 中華民国臨時政府の教育部へ 136 魯迅

の革命運動へのかかわり 139 「過激派」魯迅の誠実な教
師ぶり 141 民族革命を象徴する弁髪からの解放 143

革命の挫折と魯迅の北京転住 145 寂寞の成長と「古代」
「国民」への没入 147 陳独秀らの『新青年』と文学革

命 150 五十篇余の文章を『新青年』に掲載 153 魯
迅はなぜ小説を書き出したのか 155 政治に絶望し文学へ

戻ったのか 158 緊密・周到に構成された「狂人日記」 160
「狂人」と村人たちの「眼」の暗示 162 「人間が人間を食

う社会」の構造 164 暴君の臣民は暴君より暴虐 167
「奴隸と奴隸の主人は同じである」 170 抑圧された民衆を

批判の対象に 171 「善人」が集まって「悪人」を食う世界

IV

魯迅の小説とその人物像

189

- 174 「改革」の挫折と「狂気」からの治癒 176 「狂人日記」の分かりにくいところ 178 作者の青春からの脱却、自己獲得の記録 180 魯迅の「個の自覚」と「罪の自覚」
- 183 「妹の肉」と忘れがたい旧友范愛農の死 185
- 「科学者」Ⅱ「真の個人主義者」魯迅 189 小説家・コラムニスト・翻訳家・文学者・思想家・学者 191 魯迅の仕事における小説の位置 194 旧社会の暗黒暴露と積極的な人間像造出との二面の意図 196 十八年間にわたる筆の戦いの始まり 198 「五・四文化革命期」の啓蒙思潮と共に 200 「呐喊」の小説のモチーフと魯迅の「曲筆」 202 「絶望」と「熱情」とのせめぎ合い 203 主人公はなぜ「超人」でなく「狂人」だったのか 205 「食人社会」の英雄人物としての「阿Q」 207 「阿Q」は「超人」の対極に作られた人物 209 世界文学に通ずる普遍的な人間像 211 辛亥革命挫折の記憶から古代神話へ 212 「不周山」の女媧に理想の人間像 214 女媧の人間像と魯迅のいう「天

才」 218 絶望の壁を破れなかった『呐喊』の世界 220

第二小説集『彷徨』出版と北京脱出 221 自己凝視と虚無

への沈潜からの脱却 224 厦門から広州、そして上海へ 226

論争につぐ論争で明け暮れた九年間 228 創作集中とくに

重要な『故事新編』 230 「非攻」「理水」にみる魯迅のリアリ

ズム 233 積極的英雄人物としての禹と墨子 235 「中

国の背骨」を描こうとした「非攻」「理水」 240 古典か

ら科学的抽象によって墨子の誕生 243 「非攻」の墨子と

「理水」の禹のちがい 244 プラグマティズムの精神のあり

方 247 魯迅のマルキシズム受容 250

おわりに——魯迅が現代に語るもの……………253

西洋近代に対する魯迅と日本人 253 管理社会と言葉の力

256 自己の相対化による過激さ・寛容さ 258 変革の

前提に意志的な科学的態度 261 個人主義と民族主義 263

アジアの近代と「個」の思想 265 「劫波を度り尽くして兄

弟在り」 269

あとがき 271

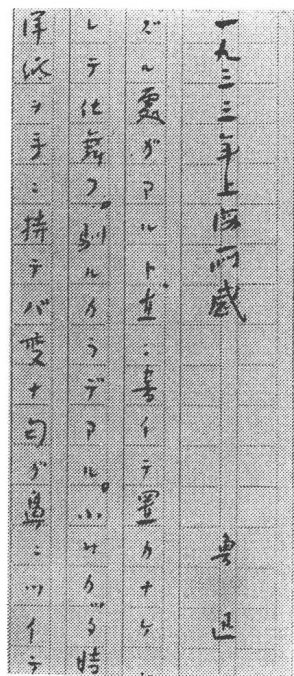
魯迅と日本人

アジアの近代と「個」の思想



(上) 1933年, 上海での魯迅, 魯迅は33年から34年にかけて, 60余りのペンネームを使って200篇以上の「雑文」(193ページ参照)を発表した。

(左) 1934年(昭和9年)1月1日付の大阪朝日新聞に掲載された魯迅の寄稿の日本語原稿。



はじめに——いま魯迅に何を問いたいのか

なぜが関心をひかない中国近代文学

ある作家やその作品について、何かを調べたり考えたりするのは、彼や作品に何かを問うことだろう。すぐれた学問的業績といわれるものは、何よりもまずそこにある問いの枠組みがすぐれているということである。今日の日本あるいは世界は、大きな思想的転換点に立たされて、従来の思考の枠組み（たとえば資本主義対社会主義等々）そのものを作り変えるような、その意味でラジカルな問いが求められているという。だが、私がいま同じ東洋人の文学者、魯迅に問おうとしていることは、残念ながら学校教師としてののはなはだ狭い、日常的な生活の視野からの問いでしかない。青年時代に迎えた戦後民主主義と、教師として経験した大学紛争という二つの経験の意味をずっと考え続けて来た者の、従来の思考の枠組みを一步も出ない問いであることを、情けなくは思うが、また、私にはそこにかたくなに固執していくしかないとも思っているのである。

私たち日本人は、一般的にいつて、西洋の近代小説はかなりよく読んでいたといえよう。書店でも、西洋文学の翻訳や紹介の本は、それこそ多すぎるほど並んでいる。それに較べると、アジア諸国の近代小説に関するものはいへん少ない。それでも中国はまだ多い方で、朝鮮、ベトナム、インド等々となると、普通の書店の書棚にはまず見当たらない。

私の周辺を見ても、中国語を第一、第二の外国語にしている大学はずいぶん多くなっているが、学ぶ学生の数は、英語、ドイツ語、フランス語に較べたら微々たるものだ。朝鮮語やベトナム語となると、教えている大学はほとんどないし、朝鮮文学やベトナム文学の専門家といえ、日本中をさがしても、指を折って数えられるほどしかない。

こんなことは、日頃私たちはごく当然としていて、改めてその理由を考えてみたりはしない。フランスの植民地だった国の知識人の中には、フランス語を学ぶ人が多いであろうことは、容易に想像されるように、一国の知識人がどの外国語を多く学ぶかは、その国の文化がどの方向をめざしているかを指し示すものだろう。明治以来の近代日本は、表向き植民地にこそならなかったが、やはり西洋を手本にして来た。西洋文学の翻訳や紹介がやたらに多く、アジア文学のそれが少ないのも、その現れの一つである。ただし、特定国の植民地にならなかったから、その手本は各分野ごとにタコツボ式に分化した。戦前は、医者や自然科学者はドイツ語をやるものと決まっていた。同様に海軍は英語、陸軍はドイツ語、ただし陸軍の中でも砲兵がフランス語を主としたのは、砲術はナポレオン以来の伝統を持つフランスに学ぼうとしたためだという話を聞いたことがある。

しかし、文学や芸術の場合は、いわば「精神文明」にかかわる分野なので、医学など「物質文明」

を学ぶ場合とは、やはり少し異なる面があると思う。それは、私たちは西洋の「物質文明」を学ぶために、無理をして英語やドイツ語を習っているが、文学つまり「精神文明」の面では、本当は（実感としては）近隣のアジア諸国の文学の方に親近感を抱いている、というわけではないことである。早い話が中国近代文学の翻訳書が少ないのは、それが売れないからであり、売れないのは、日本の一般読者にとって、それが西洋の近代文学ほど面白くないからである。そのことは単に観念や思想の上での西洋崇拜、アジア蔑視のためとばかりはいえない。アジア諸国民との友好や連帯を大切に考えている人たちの中にも、実感としては面白くないと感じている人が少なくないはずである。

つまり問題は、日本人がアジアの文学に関心を持たないことの良い悪いを論ずる以前に、まず私たちがそれを面白くないと感じるのは何故か、というところにある。明治以来、日本が西洋を手本にして近代化をはじめてから、百二十年近い年月が流れている。このへんで私たちは、これまで当然の事のように考えて来た私たちの心のあり方を、もう一度考え直してみるべきかも知れない。実感は実感だ、といってしまうのではなく、なぜそのような実感が生まれたのかというところまで掘り下げて考えてみたらどうだろうか。そうすれば当然の事でなくなるのではあるまいか。そしてそこには、これからの日本文化のあり方に対する大きな問いの一つが隠されているのではないだろうか。私がこの本で、「中国近代文学の父」と呼ばれる魯迅について、彼が西洋近代をどのように受け容れたか、またその場合、かなりの部分でそれを媒介したと考えられる日本文学との関係は、どのようなものであったかを考えてみたいと思ったのも、こうした問題にかかわっている。

明治以前の日本人にとって、中国語＝漢文は、唯一の外国語であり、中国文化は、明治以後の西洋

近代文化がそうであったのと同じように、長い間、日本の知識人の憧れの的であり、手本であった。私たちが日本文化の誇るべき遺産としてゐる奈良の法隆寺や白鳳、飛鳥期の仏像などが、いったいどこまで真に日本人の独創といえるのか。それは中国芸術の巧みな日本化であったこと、『万葉集』や『源氏物語』のような、最も日本的な日本文学の古典の中にも、実は中国の詩文の巧みな翻案とでもいふべきものが、たくさん含まれていることなどは、よく知られている。今日の西洋文学がそうであるように、中国文学の主要な作品の大部分が、いち早く輸入あるいは日本で翻刻され、その中には、明代小説のあるもののように本国では早くに亡びてしまひ、わが国にだけ伝わっているものも少なくない。明治の初年までは、清朝の詩文（当時の中国の現代文学）は、いち早く日本に伝えられ、いわば“同時代の文学”として、日本の文学の傾向に影響を与えている。

明治までの日本人にとって、中国文学はいわば同時代的に深い関心の対象だった。たとえば、江戸時代の文学者の中国の詩文に対する批評の類などを見ると、日本の知識人がいかに広くかつ深く中国文学を読み、中国人と同じように、時には中国人以上に、細やかにそれを味わっていたかに驚かされる。その事實は、彼らにとって中国文学が、この上なく面白いものだったことを語っている。本居宣長などの国学といったものが起こって来たのも、そうした当時の知識人の一般的な傾向への反発を、少なくとも一つの契機としていたであろう。

中国文学が私たち日本人にとって面白くないものになったのは、近代に入ってからである。もちろん夏目漱石（一八六七—一九一六）や芥川龍之介（一八九二—一九二七）くらいまでは、有名な『草枕』の冒頭や、漱石がすぐれた漢詩を多く残している例をあげるまでもなく、中国文学は彼らにとってま

だまだ面白いものだった。だがそれは、中国の古典文学に限ってのことである。彼らが中国の同時代の文学、すなわち中国の近代文学に興味を抱いたことは、恐らく全くなかったといってもよいだろう。漢文は彼らの教養の大きな柱の一つだったが、「支那語」は関心の対象にならなかったのである。そして第二次大戦後は、漢文もはや私たちの教養ではなくなっている。

西洋近代を学んで「優等生」の日本

それではなぜ中国の近代文学が、私たちの興味の対象として遠いものになっているのか。これは大きな問題であるが、私は二つの側面から考えてみたい。

第一は、いうまでもないことだが、新しく輸入された西洋の近代文学の方がずっと面白く感じられたのは、単に日本の知識人の新しいものの好き、移り気のせいとばかりいえない。日本人の西洋移入の態度の浅薄さを指摘する議論は多い。しかし、私たちの先人が、単に科学技術（物質文明）だけでなく、文学（精神文明）についても、これだけ深く西洋近代に夢中になったのは、やはり西洋近代の市民社会の中に新しい真理を見出し、物質文明のみならず精神文明においても、アジアに優越する価値を西洋に見出したからではないか。だから率直にそれを面白いと感じ、それにひかれ、それを学ぼうとしたのだろう。

その点ではむしろ明治以来の日本人の、彼の優越、すなわち我の敗北を認めることにおける不徹底——あたかも一九四五年の「敗戦」を「終戦」といいかえたような態度——が一貫して認められることの方に問題があるだろう。たとえば、戦前私たちが一般に受けて来た教育は、人間教育としての漢

文や修身と、文明化・近代化のための科学・技術や外国語の教育とに分化した二本立てだった。東洋あるいは日本の精神文明と、西洋の物質文明という言葉をよく聞かされた。科学・技術が人間の魂の問題、倫理の問題として、つまり西洋の精神文明として教えられることはなかったし、逆に日本あるいは東洋の精神の近代化が問題にされることもなかった。中国文学が漢文古典としてしか関心を惹かず、近代化された中国文学は興味の対象とならなかったのも当然である。

日本あるいは東洋の精神文明をどんなに高唱してみても、一方で西洋の科学・技術を受け容れることを事実上認めてしまっている以上、これはすでに大きな妥協である。そこに存在する矛盾に多くの人々は気がつかずに来た。そしてそのことと同様に、私たちは科学（また制度）と文学とを分けて対立的にとらえ、前者を客観理性的、後者を主観心情的なものと考えて疑わなかった。近代科学も近代文学もまた近代諸制度もみな近代の精神（文明）が産んだものであるとは考えなかった。このことは、私たちと同じように、十九世紀になって初めて西洋近代と出合った他のアジアの国々においても、同じだったのだろうか。少なくとも魯迅の場合はどうだったのだろうか。

第二に、私たちにとって中国近代文学が面白くないのは、私たちが心の底から西洋に憧れ、それを唯一の学ぶべき権威とし、ある場合や分野では、出来れば西洋人になり切ってしまいたいとさえ感じている、そのために「後れた」他のアジアの国々の文学の面白さを感じ取れなくなっているためではないだろうか。いいかえれば、私たちが自国の文学の持つ個性に自信や誇りを持てなくなっていることの現れの一つではないだろうか。

私たちの誇りは、日本がアジアの国々の中で、西洋近代への接近度において、最先進国であり優等

生であること、いや、ある分野では本家の西洋に追いつき追い越してさえいるというところにある。最優等生であるからには当然、他の後れたアジアの国々の文学などに注意を払う必要はないし、西洋でも、最も進んだ優れた国の文学だけを学べばよいので、少数民族国家の文学など学ぶ者は殆どいないのも不思議ではない。

別ないい方をすれば、日本にも、西洋の物質文明だけでなく、むしろその精神文明を学ばなければならぬと考えた人たちはいた。キリスト教徒やマルクス主義者やその他いわゆる西欧主義、近代主義の伝道者は、日本近代に決して少なくなかったし、主流でさえあった。しかしその人たちも多くの場合、日本の精神文明自体が生まれ変わることはなく、それが西洋の精神文明にもっと接近し、同じになることを願ったのだといえるのではないだろうか。竹内好（一九一〇～七七）はこの二つの精神態度のちがいを、前者を「回心」型、後者を「転向」型と呼んで区別し、回心も転向も変わるという点では同じだけれども「回心は抵抗に媒介されるが、転向は無媒介である」（『現代中国論』）といった。竹内のいう「抵抗」とは、「自己固執（自己であり続けようとする意志）」のことである。自立あるいは独立の精神といいかえてもよいだろう。

また竹内好は、日本近代文化は全体として「転向文化」「優等生文化」だといった。より具体的には、日本近代を担（たな）って来た主流は近代主義者だったというのである。竹内の「近代主義」は彼独特の概念で、「身分制意識の残存する前近代社会に、ヨオロッパ近代の思想が外から権威として持ち込まれた時に生まれる意識形態」（同上）としている。つまりキリスト教（プロテスタンティズム）にせよ、マルクス主義にせよ、実存主義などにせよ、持ち込まれたのは確かに近代思想であるが、それを受け取